

2016年5月9日

台湾の電子産業隆盛に思う

予測できる未来：上流でダムを開けると数時間後に下流が増水する。(ドラッカー)

群馬大学 小林春夫

台湾には4回訪れ、そこでの国際学会に下記4回参加して大学院生に論文発表させている。

- [1] International Symposium on VLSI Design, Automation and Test, Hsinchu, Taiwan (April 25-27, 2016).
- [2] IEEE 22nd Asian Test Symposium, Yilan, Taiwan (Nov. 18-21, 2013).
- [3] IEEE International Mixed-Signals, Sensors, and Systems Test Workshop, Taipei, Taiwan (May 2012).
- [4] IEEE Asia-Pacific Conference on ASICs, pp.137-140, Taipei, Taiwan (Aug. 2002).

産業に強く関係した国際学会に参加し発表を聴き参加者(所属機関)をみると、その地での産業の方向性や数年後の産業の様子がある程度推測できる。

筆者は1987年-1989年の間 米国大学院(電気工学科)に留学していた。そのとき工学部は台湾の学生で溢れていた。なぜこんなに多いのか、非常に驚いた。彼ら/彼女らは台湾の一流大学で学部4年を卒業した後に、クラスの大半で米国大学院に留学していることであった。電気電子工学分野だけでなく他の工学分野でも、全米の大学に台湾の留学生が多いということを知った。

今日のようなインターネット等はない時代であったが、あることがあると翌日にはほとんどの台湾からの留学生間に伝わっている。この情報共有の迅速さは彼らの危機管理なのかと思った。

熱心に勉強していて成績が非常に良いのにも驚いた。当時の日本の最も優秀な学生のレベルを知っていたつもりであるが、量的にも質的にも凌駕しているような印象をもっていた。米国大学での指導教授に聞くと、彼ら/彼女らは物理や数学等の基礎的な学力が高い、IC設計について1年間教えると残りの1年間で非常によい研究成果をだしてくれる(ので修士課程大学院生として受け入れる)とのことであった。

修士課程修了後は、博士課程に進む、米国で就職する等米国でキャリアを積む人が多かったような印象である。当時は自国にあまりこの分野の産業がなかったようだ。

これらの台湾出身の学生・卒業生が将来自国にもどって産業(製造業)を興すと台湾はすごいことになるかと日本人留学生間で話をしていた。(当時 日本は製造業で世界を席巻しており日本に戻ってその話をしてもほとんど相手にされなかったが。)

あれから25年以上経つが、今回の台湾訪問で現在実際そのようになったという印象をもった。